

## 中米帰国研修員活動調査報告 <その3>

中米帰国研修員活動調査報告の第三報として、今回はニカラグアで訪問した 4 名の帰国研修員について報告する。

### レオネル氏 2006 年野菜栽培技術 II

レオネル氏は農業技術試験場 (INTA) 所属の研究員であり、本邦研修ではバレイシヨの試験研究を実施した。帰国後はアクションプランの実施に意欲的であったが、試験場の大幅な予算の削減でアクションプランはおろか通常業務の維持も難しくなった。彼はその状況に嫌気がさし、2007 年末に INTA を辞め、農業資材会社へ転職した。試験場の仕事は好きだったのでとても残念だったとのことであったが、本邦研修で学んだことは、現職にも活かされていた。現職では農家へ資材を販売する際の技術指導を行っており、土壌分析に基づいた施肥設計、栽培管理、病虫害防除へのアドバイスなどは本邦研修で学んだことが基本になっているとのことであった。

彼は立場が公から民へ変わったケースであるが、本邦研修の経験が同国の農業の発展に活かされているのを感じることができた。

この日、夕食を自宅でご馳走になったが、本邦研修時代の写真を見せ、思い出を話してくれた。子供たちは片言の日本語で挨拶もしてくれた。彼は本当に日本が好きなのだと思えることができた。



レオネル氏(中央)と日本好きの家族。長男(左)はいつか自分も日本に行きたいと目を輝かせていた。右は報告者。

### ニカラグア国立自治大学レオン校 (UNAN-Leon)

当大学からは 2007 年から継続して、3 名の研修員を受け入れた。ミゲル氏、ホルヘ氏、アドリアン氏は同じ農業生態学研究室所属の教員であり、150 人程度の学生を受け持っている。

3 名は協力して試験研究を行っており、薫炭器や土壌蒸気消毒機の自作、病虫害防除のためのバンカープランツや整枝誘引試験の実施、また品種比較試験に本

邦研修での経験が活かされていた。

本邦研修では様々な種類の共通実験を行ったことが特に良い経験だったとのことである。大学は教育も調査研究も行うことから、どのように試験を組み立て、結果をどう評価するか、またそれを如何に学生に伝えるかが重要であり、共通実験・個別実験を通じて、新たな視点を獲得することができたとのことであった。

現在彼らが力を入れているのは、トマトの育苗試験である。現地では本葉 3 枚程度の若苗を本圃に定植するのが慣行法であるが、日本では一番花開花程度の大苗を定植していたことに着目し、大苗を作ることによって作期の拡大を図ろうという計画である。すでに育苗に適した培土の作成には着手している。しかしながら現地には大苗育苗に適したポット資材がなく、現在は果樹育苗に使うビニールを使っているが、根鉢が巻く前に壊れてしまうことから、育苗ポットの代替品が課題となっている。こうした小さな障害で活動が停滞しないように、帰国後の研修員を支援できる体制が必要ではないかと感じている。

このように、試験研究と教育活動を同時に行える大学という環境では、本邦研修で得られた経験を積極的かつ効率的に活用できるようである。加えて、彼らの活動の最終裨益者は将来現地の農業やその関連分野に携わる若者であることから、その波及効果は高いと考えられる。また UNAN-Leon のケースでは、3 名が協力して本邦研修の活用を検討しており、それが高い成果をあげていた。これは研修スキーム内で同じ所属先/関係機関に研修員を集中させることが、より効率的に研修成果を発揮させる手段になり得ると考えられた。



自作の薫炭器(左)はドラム缶で作成した。薫炭は育苗培土に混ぜて使用する。

土壌消毒機(右)は左の青い缶に土壌を入れ、右手前の黒い缶で湯を沸かし蒸気をパイプで送る。UNAN の 3 名の創意工夫には目を見張る。

